授業づくりを考える

八島　弘典

知識や技能はもとより，思考力・判断力・表現力，学ぶ意欲などを含めた「確かな学力」を育成することが求められている。そのためには，どのような授業をデザインしたらよいか。学校において，様々な取組がなされているが，ここでは，「学ぶ意欲を育む学習指導」と「授業者の自己評価」の観点から，授業づくりを考える。

［キーワード］授業づくり　学ぶ意欲を育む学習指導　授業者の自己評価

はじめに

授業づくりにおける最も重要なポイントは，学ぶ意欲を育む学習指導を如何に実践するかにある。子どもたちの興味・関心がどこにあるのかを想定し，それを基に学ぶ意欲を掘り起こし高めることが大切である。教員は，学ぶ意欲を育む，質の高い授業を目指して，様々な努力を重ねている。しかし，努力しているにもかかわらず成果があがらず，授業改善のための良い方法がないと感じたとき，ときとして授業スタイルを固定してしまうこともある。ここでは，授業を振り返り，授業を点検，評価し，次の授業に生かすことができる，実践的な授業づくりについて検討する。

１　学ぶ意欲を育む学習指導

学ぶ意欲を育む条件として，学ぶ楽しさ，達成感を実感させることが考えられる。学ぶ楽しさを実感できるのは，分からないことを解決しようとする中で，新たな発見や自分の納得の行く結論が得られたときである。

達成感や成功感の獲得，すなわち自己を肯定的に評価することは，次の学習への意欲へとつながる。今日，自己評価カードや自己評価表などのさまざまな興味ある提案がなされている。これらから学ぶべきところは実に多いが，学習において達成感や成功感を実感することの少ない児童生徒においては，ただ出来ないことを確認するだけという要素も含んでいる。また，関心・意欲・態度などを「評定」するためのものとなっている場合も多い。自己評価の本質は，「自分への励まし」である。したがって，自己評価カードや自己評価表に記入された内容は，授業場面で積極的に活用できるようにすべきである。理解力の劣る児童生徒が授業がよく分からないと感じているときに，教員が児童生徒に声を掛けたり，アイコンタクトによって励まして授業に参加させたりしながら，児童生徒に努力させて，少しでも分かったときには適切に賞賛するなどして，自己の有用性への共感を与えることが大切である。

学ぶ楽しさと達成感の実感は表裏一体の関係であり，本質的には，同じものである。したがって，学ぶ楽しさを実感できるような教材を用意するとともに，授業の中で，わかった，発見したという達成感が得られる場面設定をデザインする必要がある。鈴木誠[※1)]は，自己効力感（学習へ能力についての自信を示す感情）が強い生徒は学習意欲が高いとし，自己効力感を高めるために，学生が自ら授業を計画し教授するという実践を行っている。この実践によって，自分の行動を自己評価しモニタリング技能を身に付けさせることができ，その結果，自己効力感が高まり，学習意欲が向上すると報告している。この取組は，いわば生徒や学生を授業の文脈に生かす参加型授業の究極とも言えるもので

ある。このことは，授業をデザインする際に，授業において本時の目標，すなわち課題を児童生徒にわかりやすい形で示し，その課題解決に向けて児童生徒が主体的に取り組めるように工夫し，児童生徒が自己評価を肯定的にできるような教員の励ましが極めて重要であることを示している。

2　授業者の自己評価

自分の行動を自己評価しながら自分の行動を修正していく技能を身に付けることは，授業づくりをする上で極めて重要であるばかりでなく，その技能は生きる力とも言えるものである。しかし，他を評価することには慣れているが，自己を評価することを苦手としている教員も少なくない。授業では，授業者としての行動や，児童生徒の態度や理解の状況をモニタリングしながら，説明の仕方を工夫したり，個別指導やグループ指導などの効果的な指導を入れ，柔軟な姿勢で授業を展開することが求められる。

授業において，モニタリング技能を身に付けていない教員は，児童生徒へ一方的な情報の伝達をしている場合がほとんどである。もちろん，児童生徒の表情を見ながら，それに応じて情報の伝達の仕方を巧みに修正しながら授業を続けることは可能である。しかし，児童生徒の目的意識が極めて高い場合を除いて，講義型の授業がうまくいくことは希である。一般に，小中高における授業では，授業者と学習者の間には双方向の情報の伝達が不可欠といえる。良い授業をつくるには，授業者から学習者への情報を伝達する技能，学習者からの情報をキャッチし伝達方法を修正する技能が必要である。このモニタリング技能の他に，伝達する情報の質を高めることが良い授業をつくることにつながる。モニタリング技能を身に付けていても，伝達する情報の質が低ければ，良い授業は成立しないし，その逆の場合もそうである。

授業を評価する方法には，テスト（評価テスト），児童生徒による授業評価カードなどがあるが，もっとも手軽な方法として，授業中における児童生徒への質問とそれに対する返答による評価がある。理解力の程度に応じて，授業者の頭の中で児童生徒をグループ分けしておき，それぞれのレベルに応じて質問し理解の程度を確認することは，すぐに授業者の行動に反映できるという利点がある。この場合，クラス全員に何をどこまで理解させるかという目標を明確にし，目標に達しなかった児童生徒に対する指導の手立てを予め準備しておく必要がある。この方法と評価テスト（小テスト・単元ごとのテスト）などを組み合わせて，授業者の自己評価を適切に行いながら授業を改善し，達成目標を必ず実現しようとする強いプロ意識を持つことが求められている。いずれにしても，質問の返答やテストの結果は成績を付けるためのものでなく，授業者の評価そのものであることを自覚し，客観的に自己を評価できる技能を身に付けなければならない。

当センターでは，平成15年度より，所員が担当する講座をお互いに参観し，講座指導における評価を講座参観カードに記入して授業者に提出し，授業者の自己評価の資料とし講座指導の改善に役立てている。講座参観を実施してみて，他の授業者については客観的に評価できているのに，自分が授業者として講座で指導しているときには，モニタリング技能が十分に身に付いていないため，授業者としての自分を客観的に評価できていない場面がしばしば見られた。当センターの所員が授業者として相当な力量を有していることを考えると，授業者の自己評価においては，他者の評価を取り入れて実施していくことが大切であることを示唆していると言える。

参考文献

1）鈴木誠　　学ぶ意欲を引き出す授業とは何かー北大一般教育演習「蛙学への招待」の授業デザインー　高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習ー12　2004
鈴木誠　自己効力感を育む理科授業の実践ー生徒が行う生物授業ー　理科の教育554号　1998

（やしま　ひろみち　事業課長）

八島